

スーフィー聖者アルファキー・アフマド・ウマルの人生とその時代背景

石原美奈子 いしはら みなこ / 南山大学

エチオピア西部で広く崇敬を集めているムスリム聖者に、西アフリカ出身のアルファキー・アフマド・ウマルがいる。1953年に没した後彼の人気は衰えるどころが高まっている。ここでは、エチオピア西部の人々との関わりを中心に、彼の生涯をみてみよう。

アルファキーとは何者だ？

私がアルファキー・アフマド・ウマルと「出会った」のは1993年である。当時まだ大学院生だった私は、エチオピア南西部にあるジンマ県でイスラームの拡がりについて人類学的調査を行っていた。南西部のムスリム社会では、イスラームの普及に貢献した人物の死後に建てられる墓廟(クッバ)に地域住民が定期的に参詣するという習慣がある。そうした墓廟をひとつひとつ訪ね歩き、そこに埋葬された人物たちの歴史についてインタビューするなかで、私は西アフリカ出身のアルファキー・アフマド・ウマルの名前が頻繁に登場するの気づいた。この人物は西アフリカからどのような経緯でエチオピアにやってきたのだろうか？なぜ人々からこれほどまで尊敬をもって慕われているのだろうか？アルファキー・アフマド・ウマルの足跡を辿る私の旅はこうして始まった。

アフリカ大陸におけるイスラームの拡がりが、超自然的・呪術的な力をもつとされる聖者やスーフィー教団(イスラーム神秘主義教団)によるところが大きかったことはよく知られている。エチオピアでも、数多くのムスリム聖者が現れ、その人間的な魅力や、知識・修行に裏付けられた聖性によって民衆を救い導いたとされる。ムスリム聖者たちは、神の恩寵(バラカ)を民衆にもたす存在として崇敬を集め、その死後も、信者は困った時にムスリム聖者の名を呼び、定期的にその墓廟を訪れた。アフリカのイスラーム史の大家であるトリミンガムは、その著書『エチオピアのイスラーム』(1952)において、ムスリム世界に広くみられる「聖者信仰」に相当するこうした慣習がエチオピアにもあることを示唆している。ムスリム聖者は必ずしもスーフィー教団に属するとは限らないが、アルファキー・アフマド・ウマルはティジャー

ニーヤと呼ばれるスーフィー教団に属しており、神秘階梯のレベルの高い導師であったとされる。

今ではティジャーニーヤは、エチオピア西部のムスリムの間で最も広く受け入れられているスーフィー教団のひとつとなっている。ティジャーニーヤは、モロッコ、アルジェリアで活躍したアフマド・アッティジャーニー(1815年没)により創設され、19世紀には西アフリカに浸透し、そこを発信源としてアフリカ全土に拡がり、現在ではグローバル化の影響により世界的に拡がりをみせている。スーフィー教団は「教団」といっても閉鎖的な生活共同体を構成することはなく、メンバーは普通の日常生活を送りながら、礼拝や祈禱を少し多めに行う程度なので、誰でも参加できる。ただティジャーニーヤが他と異なるのは、一旦ティジャーニーヤに入ると他の教団活動を停止しなければならない点である。スーフィー教団の教えは、師弟の二者関係のネットワークを介して伝えられるが、エチオピアにも人的交流の結果として19世紀後半にティジャーニーヤの教えが伝わった。アルファキー・アフマド・ウマルは、ティジャーニーヤの導師として、その普及に大きな役割を果たしただけでなく、同教団の「サラト・アルファアティフ(開放者への祈禱)」という祈禱句の勧奨を通して非ムスリム民衆へのイスラームの拡がりにも貢献したとされる。

「アルファキー(al-faki)」という尊称は、法学者(faqih)と清貧に生きる者(faqir)の二つを含意し、アラビア語圏のスーダンでは法学的知識をもちあわせて知識人('ulamā)が清貧を是とするスーフィー(神秘修行者)でもある場合にこの尊称をつけて呼ばれる。エチオピア南西部において「アルファキー」という尊称を付されるのはこのアフマド・ウマルただ独りであり、この尊称には彼がスーダンからやってきた

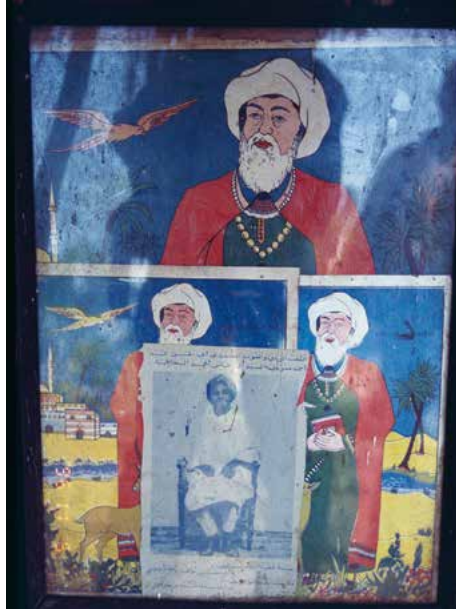


故ハッジ・アッバ・ドゥラ(右から3人目)。筆者(左から3人目)は、アルファキーの伝記の翻訳・解説をこの人物にお願いし、1ヶ月間ほぼ毎日通い続けた。

*写真は、p.5左、p.6下、p.7左を除き筆者撮影。



アルファキー・アフマド・ウマル。



アフマド・アッティジャーニーとアルファキー・アフマド・ウマル。

ある信者の家の壁に飾られた預言者ムハンマド(右上)とアフマド・ウマル(右下)の名前(イスラームでは偶像崇拝を禁じているので預言者の肖像画ではなく名前を飾る)。



スーフィーの知識人であり、聖者であるという意味合いが込められている。本稿では、アルファキー・アフマド・ウマルを、現地オロモの人々同様、「アルファキー」と呼ぶことにする。

アルファキーは、現在のナイジェリアの北東部に位置するボルノ出身で民族的にはハウサであったとされる。1891年に生まれ、19歳で両親を同時に失ったアルファキーは、西アフリカの慣例に従って陸路でメッカ巡礼に旅立った。メッカ巡礼を終えたアルファキーがスーダンに滞在していた時、エチオピアに行けという天命に導かれて、現在のエチオピア西部に位置するベニシャングルに入った。

「賢き異人」として： ベニシャングルにて

ベニシャングルは、現在スーダンとの国境沿いにあるベニシャングル・グムズ州の一部である。ベニシャングルには、ベルタ、マオ、コマ、グムズなどナイロ・サハラ系の諸言語を話す民族が住んでおり、古く

から金の産地として知られ、17世紀後半から19世紀前半までは西方のセンナールを中心とするフンジュ・スルターン国の支配下にあった。フンジュの勢力下に置かれた王国のうち、ベニシャングル、ホモシャ、アコルディ、ファダスイの4つは、19世紀末にエチオピア帝国に組み込まれた。この4王国に共通する特徴として、19世紀にイスラームが導入された点と、世襲の王家にムスリムの「賢き異人」が婚入している点が挙げられる。西方から移住してきたこれら「賢き異人」は、地元の人からその識字能力と教養を認められて王の娘と結婚し、王国の統治にも寄与したとされる。この4王国は、19世紀末にエチオピア帝国に征服されたが、一部自治が認められていた。

当時ベニシャングルの王であったムハンマド・アブドゥッラフマーンは、アルファキーを知識人として評価し、自らの娘のひとりとその妻として与え、領土の支配をも託したという。アルファキーはベニシャングルに9年間滞在したとされるが、その間一方行政の仕事に携わりながら、他方

でスーフィーとしての修行も怠らなかつた。アルファキーにとって、この二つの営為は十分に両立可能であった。アルファキーは、可視の世界で世俗の仕事に勤しみながら、同時に数珠(マスバ)を繰りながら不可視の世界でも活動していたと言われる。

だがそのことが原因でアルファキーはムハンマドと仲違いしてしまう。アルファキーが食事時にも数珠を手放さないことに対してムハンマドが不平を漏らしたのである。アルファキーは立腹し、呪いの言葉を吐いた。その呪詛のためにベニシャングルは、エチオピア帝国による征服後も辛うじて守られていた自治権を失い、ムハンマドは当局に拘束されたと言われる。ムハンマドの妻ザイナブは、夫がアルファキーの呪詛の犠牲となって逮捕・拘留されたとして、アルファキーのもとに軍隊を差し向けたが、5ヶ月経っても彼を捕らえることができなかった。逆に、アルファキーは自らザイナブの家を訪れ、1週間以内に「兵」を送り込むと宣言した。その予言通り、ベニシャングルで天然痘が流行し、ザイナブの息子



ミンコ村に残る、アルファキーの修行小屋。



アルファキーがミンコの自宅の裏庭に自ら植えたカートの木。

も罹患した。そのためザイナブはアルファキーのもとに四つん這いになって赦しを乞いにきた。アルファキーは彼女の行いを赦し、彼女の息子は病から快復した。

ムスリムの薬師として： 西ウォレガ地方にて

ベニジャングルを離れたアルファキーは南に向かい、西ウォレガ地方に入った。そこは、クシ系のオロモ語を話すオロモ農耕民が住んでおり、エチオピア帝国編入後に中央から派遣されたキリスト教徒のアムハラ行政官から搾取を受けていた。このアムハラ行政官は1922年頃フィンチョという村に居を構えて、現地のオロモ農民に重労働や重税を課していたとされる。アルファキーはムスリムがほとんどいないこのフィンチョ村で、「薬師(アッバ・コリッチャ)」として知られるようになる。「薬師」としてのアルファキーの評判を耳にしたアムハラ行政官は、妻が病気であった時に彼を呼び寄せて治療にあたらせたのである。妻が快復したことを喜んだ行政官は、アルファキーに褒美を授けようとするが、アルファキーはそれを拒み、代わりに納税拒否で投獄されたオロモ農民の釈放を求めたとされる。アルファキーはこの行政官から功績を認められて、土地を授けられた。

アルファキーに与えられた土地は、今のデンビドロ市の近くのリバ村にあった。さらに1925年頃、アルファキーはリバから数キロ北にあるミンコ村に土地を寄進されて移住した。アルファキーは、ミンコ村に20年ほど滞在し、そこで多くの奇蹟を起こしたとされる。信者がアラビア語で記したアルファキーの伝記には、葉っぱを金銭に変えた、人やラバを蘇生させた、ハルワ

(観想修行)の最中に瞬間移動して他所に出現した、精霊に取り憑かれて病に陥った者を精霊を使って治療した、など様々なエピソードが記されている。

だがアルファキーは、決して熱心な宗教指導者ではなかったようだ。西ウォレガ地方のオロモ社会でムスリムは少数派であった。オロモは神(ワカ)を頂点とする在来の神霊観念をもっており、西ウォレガ地方では19世紀後半にキリスト教が、西洋のプロテスタント系のミッション活動によって広がり始めていた。またエチオピア帝国に編入されてからは教会をもつ町が設立され、キリスト教の普及が進んでいた。アルファキーは、西ウォレガ地方のキリスト

教徒に対して寛容な態度で接したとされる。そして、ジンマ地方などムスリム地域からやってきた厳格なムスリム宗教指導者たちがオロモ住民に対してイスラームへの改宗を無理強いし、イスラームの教義(禁酒など)を厳格に適用しようとする、それを戒めたとされる。アルファキーは、衣を持たない者には衣を与え、病をもつ者を健康にする、という仕方では住民の欠乏感を満たし、住民が進んでイスラームを受入れるように導いたのである。

1930年代前半になると、アルファキーの名声は、エチオピア西部一帯に広がり、国内各地、とりわけ19世紀以来イスラームが根付いていたジンマ地方からの訪問客

アルファキーとイタリア軍将校。



が押し寄せるようになる。なかにはミンコ村周辺に住み着く者もいた。客の接待に食事は欠かせない。穀物は十分にあったようだが製粉が追いつかなかった。当時西ウオレガ地方の女性たちは、鞍形石臼とすり石を組み合わせた方法で製粉作業を行っていたが、これは非効率である上に重労働でもあった。水力を動力源とする製粉所建設のためには建築技師が必要であった。そこに現れたのが、ジンマ出身のハッジ・アダムという人物である。ハッジ・アダムは、ジンマで建築技師として製粉所建設の経験もあった。アルファキーの手柄に惹かれたハッジ・アダムは西ウオレガ地方への移住を決意し、終生アルファキーのもとで、製粉所建設のみならず土地財産の管理などの俗事の一切を取り仕切るようになったのである。

イタリア植民地統治と ジンマからの訪問客の増加

1936～41年の5年間、エチオピアはイタリアの植民地統治下に置かれた。ミンコに近いデンビドロ町にもイタリア人が飛行機でやってきた。飛行機など見たこともないオロモ農民たちが狼狽えるなか、アルファキーは27機もの飛行機をまるで「羊」のごとく操りながら広場に着陸させたといわれている。アルファキーは、イタリア人たちを毎日のように「バナナと卵」で接待し、信頼をとりつけ、その見返りとしてムスリムの衣服を身に着けた者を強制労働

に連行しないように約束をとりつけたという。アルファキーは、敵とも味方とも知れぬ外国人たちから住民を守るための仲介役となったのである。

イタリア統治からエチオピアが解放された後、アルファキーのもとには以前に増して大勢の訪問客が押し寄せるようになった。イタリア統治期に道路網が整備され遠路の旅が容易になったこともこれに拍車をかけた。訪問客の増加は次第にアルファキーにとって負担となっていった。そこで、1942年、アルファキーは幹線道路が目の前を通るミンコのマサラ（邸宅）を離れ、道路から離れたところにあるクサイエ村に移住した。

ところがここでも訪問客、とりわけジンマ地方からの客の足は途絶えなかった。現在ジンマ県があるところには、1932年までジンマ王国があった。ギベ川源流域に成立したオロモの5つの王国のうちのひとつであったジンマ王国は、19世紀末にエチオピア帝国に組み込まれた。5つの王国とも19世紀にイスラームを受け入れ、それぞれの王たちは他地域出身のムスリムの商人・知識人・スーフィーの定住を促し、民衆へのイスラームの普及に取り組んでいた。20世紀初頭のジンマ地方では、スーフィー教団に入ることはムスリム知識人たちにとってある種の流行りとなり、人々は神秘階梯の高い導師を求めていた。そのため西ウオレガ地方のアルファキーの噂を聞きつけたジンマの人々が、その教えにあ

ずかろうと大挙して押し寄せたことはとくに驚くにはあたらない。

ジンマ地方ゲラへ、そしてヤア

1947年、アルファキーは、クサイエを離れ、首都アジスアベバに向かった。そこで、アルファキーは皇帝ハイレセラシエ1世に謁見し、皇帝自身から、ジンマ地方の西端にあるゲラにある土地を譲り受ける許可を得たとされる。アルファキーは、ジンマまで飛行機で向かい、そこから陸路でアフアッコに向かった。ゲラは、豊かな森が生い茂る地域である。アフアッコからさらに1時間ほど徒歩で山林を分け入ったところにアルファキーは居を構えた。その後、1951年にアルファキーはメッカ巡礼に旅立った。メッカで巡礼を終えたアルファキーは、一旦ボルノに帰郷したとされる。その1年後、ベニジャングルのアソサに姿を現したアルファキーは、西ウオレガ地方で待機していたハッジ・アダムらとともにヤアに向かった。

ヤアは周辺にマオヤコマなどの民族が住む地域にあり、竹林が広がっていた。アルファキーはそこをオロモの従者らとともに開拓し、ティジャーニーヤの共同体を設立した。だがその半年後、アルファキーは1953年4月2日、この世を去った。ヤアには、アルファキーの墓廟と従者・信者の村が建設され、毎年、エチオピア各地から大勢の信者が参詣に集まってくる。 **FP**



イタリア植民地支配から解放された時のアルファキー（前列右から3人目）。



1952年にアルファキーがアソサに戻ってきたという朗報をウオレガにもたらした人物。